

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	伸び上がるのだ : 詩
Author(s)	藤村, 次郎
Citation	龍南, 1 8 2 : 4 9 - 5 1
Issue date	1922-07
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/7862
Right	

伸び上るのた

藤村次郎

天地のなべてを融合^{ごうご}はす、ゆらゆらした光に包まれ、
滄浪と生暖い息を吐いて、涯しない荒野は、

眞盛りの力をあらん限り踏張り、――

空に燃え上り、ぐんぐんと伸び上る、

ありとある草木はめいめい歡喜に戦く手を差し翳して、
無限から無限への荒野をするすると滑る生々しい風に、

ぞんぶんと肌膚を吹き曝させ、

莊重な、靜かな、寂しい、しかも楽しい合奏のただ中に、夢幻の舞踏を續ける。

ここは、開闢前の淡乳色の落莫に。

陶醉しきつた創造の祭壇である。

おう、何と言ふ曠濶な深淵な柔和な大空だ。

その漫々と湛へた微温い温泉に身体を伸し、

その羽ばたき上らうとする放慢なる法悦に精神を浸し、

大自然は絶大な調和の抱擁に息づいてゐる。

さて、この静もりきつた初夏の白晝の甘い沈黙に、

ふーいと輕やかな翼を擴げて浮び出た、輝かしい眞名鶴は、

そのまま陽炎の中に溶け込んで、——雲はすーいすーいと滑つてゆく。

ざらりと地べたを射込んで、蒼空に狂はしく、

焼け爛れた日輪が踊る。

おう、何とその素晴らしい魅力、享樂、奔熱、そして力。

偉大なる母性の乳房に昵と抱き込まれて、

手足を踏伸し、躍り叫ぶ眞裸の嬰兒、

熱に痙攣つて、烈しく狂ひ廻る戀人のところ、

かくも新しく、かくも輝かしく、

ざらりと地べたを射込んで、蒼穹に狂はしく

、焼け爛れた日輪は踊る。

今し、荒野は、

燃え盛る情熱の脈搏をうつて、

永却の神話の中に天與の生長を續けて行く。

どこに生さんと藻掻き飽いた生命の呪咀が、

どこに貪欲な不平が、さては、

どこに地蟲の微仄な呻吟さへもが、あるのだ。

雑駁な、しかも神妙な階律の中に、

神ながらの原始的な祝福の中に、

荒野の木も、草も、葉も、花も、すべてが、

空に燃え上り、ぐんぐんと伸び上るのだ。

(大正十一年六月)